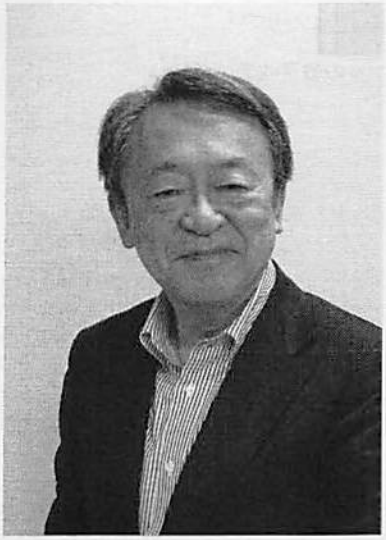
特集　この人に聞きたい

中学校教育に望むこと

ジャーナリスト
東京工業大学特命教授
池上　彰　先生



池上　彰（いけがみ　あきら）先生（略歴）

ジャーナリスト、東京工業大学特命教授、名城大学教授。愛知学院大学、立教大学、信州大学、日本大学、順天堂大学でも講義を担当

一九五〇年　長野県生まれ
慶應義塾大学経済学部卒業
一九七三年　NHKに記者として入局
一九七九年　島根県松江、広島県呉など地方都市で勤務
東京放送局社会部に異動し数々のニュースを取材、その後、「ニュースセンター845」「イブニングネットワーク」のキャスターを担当
一九九四年　「週刊こどもニュース」でお父さん役を担当し十一年間務める
二〇〇五年　NHKを退社しフリーのジャーナリストに転身
二〇一〇年　テレビ番組での解説が分かりやすいと評判を呼び「いい質問ですねえ」の言葉が『二〇一〇ユーキャン新語・流行語大賞』（現代用語の基礎知識選）のトップテンに選出される
二〇一二年　東京工業大学リベラルアーツセンター教授に着任
二〇一二年　第五回伊丹十三賞受賞
二〇一六年　第六十四回菊池寛賞受賞（テレビ東京選挙特番チームと共同受賞）
その他、多数の著書がある

編集部　お忙しい中、ありがとうございます。

機関誌「中学校」という全国の中学校長が読んでいる冊子に、ぜひ池上彰さんのお話をという声が多数ありまして、本日はよろしくお願いいたします。

では早速、今すごく時代が変わっているんですけれども、こういう時代に我々校長としてはどのような学校づくりをすればよいとお考えですか。

池　上　難しいですね。

編集部　様々に外国も経験されているし、いろいろと御存じでもあると思うので、学校へのお考え、それから教職員にはどういった資質や能力が必要か、そういったことを自由にお話しいただけるとありがたいです。

池　上　海外をいろいろ見ると、日本の教育制度というのは素晴らしいなと。小、中、高校――だから後期中等教育までですね。高等教育、大学になると相当、問題があるんですが、小学校、中学校、高校――高校もいろいろありますが、少なくとも義務教育の小学校、中学校に関しては、一億人を超える人口がありながら、これだけの均質な学力を維持できているというのは特記すべきことです。

ＯＥＣＤがやっているＰＩＳＡのテストで、よく学力が上がったとか下がったとか言っていますが、例えばフィンランドはいい成績をとっていますけれども、人口五〇〇万人ですからね。他のシンガポールにしても香港にしても、みんな人口が非常に少ない。その中で一億人を超える人口でこれだけ高い学力を維持できているというのはないわけです。アメリカもはるかに順位は下になっていますから。中国も、実は上海とか都市部だけが特例として参加しているんですね。中国全土で参加しているわけではないんです。それをやったら非常にレベルは低くなってしまうわけで、表面だけ見て学力がああだこうだと言うのは意味がないなと思っています。

アメリカなんかへ行くと、とてつもなく優秀な学生がいる一方で、アルファベットすら書けないような人たちがいる。格差がとてつもなく大きいですよね。そういう中で、日本はこれだけ均質な学力が維持できているというのは特記すべきことですし、それが日本の治安の良さにもつながっているんじゃないかなと思います。

特に、例えばアメリカですと、スーパーマーケットでレジを打っている人とか、あるいは銀行の窓口の人――よく銀行家のことをバンカーというんですけれども、実はあのバンカーというのは、窓口の奥にいる、見えないところで仕事をしている人たちのことで、窓口にいるのはテラーといって、それこそ計算から何から間違いだらけというのが実態です。本当に職種によってレベルが全く違うんですね。

日本の場合、どこだろうときちっと計算ができる、暗算ができる。当たり前のことですが、それを見るだけでも素晴らしいなと思います。もっと自信をもったほうがいいと思うんですよ。

日本の子供たちが、特に高校レベルで、例えばアメリカに留学したりすると、日本の学生の学力の高さに向こうがびっくりしますよね。日本で数学が苦手でも、アメリカに行くと突然「数学がとってもよくできる」になっちゃうんですよ。大学に入ってからがものすごく遅いますが、普通科高校卒のレベルでいうと、日本の学力というのは大変なものです。

編集部　逆に、いろいろな国々との比較の中で、日本の教育の課題みたいなものはどのように御覧になっていますか。

池　上　私も東工大をはじめ、それ以外の大学でも教えているんですが押しなべて素直で、先生の言ったことをひたすらノートにとって、試験のときはそれをそのまま吐き出す、それでいいみたいなことになっているのが大変物足りないですね。ですから私の場合は、この前、前期の試験の採点が全部終わったんですけれども、大盈に落としているんです。

編集部　東工大でもですか。

池　上　東工大では三割落としているんです。三割落とし続けてきたら、私は非常に成績評価が厳しいということを覚悟した学生だけが履修するようになったものですから、落ちるのが二割ぐらいに減りましたけれども。

立教大学の試験もこの前終わりましたが、まあ皆さん真面目で、私が授業でやったことをそのままひたすら答案に書くわけです。全て記述式でやりますから、「何々について論じなさい」というもので、自分の意見なり、授業を受けて――授業でこんなことをやりましたというんじゃなくて、それをもとにして自分ではどう考えるのかとか、新たな視点があるかどうかというところで見るんですね。そうすると、非常に不満足なもの、つまり私の授業をそのまま写しているだけじゃないか、こういうのは成績が非常に厳しい評価になります。

編集部　知識を自分の中で覚えて、それをアウトプットするだけなのですね。

池　上　そうですね。高校までというか、日本ではずっとそれをやっていればいい成績がとれてきたのかな、それじゃだめだよなと思うんですね。

編集部　今までは経済成長の中とか戦後の復興期の中でということもあったのでしょうが、これからの社会を考えれば、それだけではだめだというのが先生の今の御指摘ですね。

池　上　そういうことですね。

アメリカとかイギリス、特にアングロサクソン系はシステムをつくるのが上手なんです。

今、東大が、あるいは日本の大学がアジアの中でランキングがどんどん下がっている、学力が下がっている、大変だと騒いでいるでしょう。幾つかのランキングをやっている組織があるんですけれども、アメリカとイギリスなんですね。それらのランキングのシステムは、何をやっているかというと、アメリカやイギリスの大学が上位になるような条件でやっているんですよ。英語の授業がどれだけあるかとか、外国人留学生がどれだけいるかとか、あるいは外国の権威のある学術雑誌にどれだけの論文が掲載され、さらにその論文がどれだけ引用されているかというのでやるんです。そういう外国の雑誌に英語で論文を出すのは理科系になるわけです。そうすると、東大や東工大や大阪大学は日本の中で上位に行くんですが、一橋大学のような文科系のところは全然ランキングに出てこないんですね。じゃ、一橋のレベルが低いかというと、そういうわけではないですし、英語で授業が行われているかどうかといえば、それは日本の場合少ないわけですよね。

というのも、明治のときに、例えば東京大学でも、ヨーロッパやアメリカの高等教育に追いつこうとしてお雇い外国人を雇用しました。最初は英語で授業が行われていたんですね。それを当時の明治の人たちが一つ一つ日本語に置きかえていったわけです。いわゆる学術用語というのを全部日本語に置きかえて、フィロソフィーを哲学と訳したり、エコノミーを経済という言葉に置き換えたりした結果、高等教育、つまり大学教育を自国語で教えることができるようになったんですね。これは欧米にしてみると、日本の大学生に「大学では何語で講義を受けてきたの」と言って「日本語で受けてきたよ」と言うと驚く人がいるわけです。高等教育というのは英語かフランス語で受けるものだと思っているときに、自国語でそれができるのかということですね。よくシンガポールやフィリピンの学生が英語をぺらぺらでしゃべる、すごいと。だって、あれは英語で授業なんですから当然です。タガログ語での高等教育というのはないわけです。

編集部　公教育が英語になっているわけですね。

池　上　高等教育がですね。高校までは自国語での教育が受けられますけれども、大学というのは大体英語かフランス語です。それを自分の国の言葉でやれるというのは、だからこそ日本の学力レベルが上がり、科学技術がどんどん

進んだということになるんですよね。

だから、結果的に大学で英語でいろいろな授業をするということがなかった。それがランキングでいうと低くなる理由です。ランキングを上げなければいけないというので今何をやっているかというと、東工大もそうですけれども、英語で授業をしなさいと言われている。留学生がもっと受けやすいようにというので、それぞれの英語教授法というのを先生たちが受けなければいけないんですよ。

編集部　イマージョン教育みたいな感じですか。

池　上　まさにイマージョン教育ですね。私の場合は、その前に定年退職して、今は特命教授になったので、それを受けないで済んでいるんです。

当たり前ですけれども、自国語でない言語でやろうとすると、IQ的にいうと大体二割落ちるというんですね。先生が教えるときも母国語じゃないわけですから、ちょっと下がりますよね。それを受けているほうも下がるわけですね。下がるのと下がるのを掛け合わせたらどのぐらいになるか。八割と八割を掛けたら六割になっちゃうわけでしょう。なので、私に言わせれば本末転倒というか、意味のないことをやっているんだなと思います。

編集部　英語で授業をしようというのが今すごくはやっているというか、盛んに言われています。でも、からくりはそういうところにあるんですね。

池　上　つまり、英語で授業が行われている比率が高いとランキングが上に行くような仕組みになっているわけですね。それはアメリカやイギリスの組織が自分たちの大学のランキングが上に行くような仕組みを作っている。そうすると、日本はその仕組みに合わせて――そもそも、何か仕組みがあるとその中で頑張っちゃう、これが日本の特性だと思うんですね。

例えば、札幌オリンピックのとき、スキージャンプで日本が金銀銅を独占しましたよね。日の丸飛行隊と言われたでしょう。あれはヨーロッパのスキー界にすれば屈辱的なことで、スキー競技というのはヨーロッパの長い伝統があるのに、何でアジアの島国に金銀銅をとられてしまうんだとなって、ルールを変えたんですね。日本に不利なルールにした途端、日本がメダルをとれなくなるわけです。また一生懸命頑張ってメダルがとれるようになったら、またルールを変えたんですよ。そして今、また頑張ってメダルがとれるようになってきている。札幌オリンピックのときに金銀銅をとれたのに、何で最近はメダルがとれないのか。日本の選手のレベルが落ちているんじゃなくて、ルールを変えられちゃっているんですよ。つまり、アメリカやイギリスの人たちは自分にいいようにルールをつくる。ルール

セッティングです。

それこそアジェンダセッティングというんですけれども、何を議論しようかということを向こうがまず決めるんですね。日本は、先生がおっしゃったことをノートにとって、一生懸命頑張っていい成績をとるということをずっとやっているものですから、そもそも大学のランキングとか国際的なルールというのはこういうものですよと言われると、「ああ、そういうものなんだ。そのルールの中で頑張ろう」とやるんですね。それだと、そこそこいいところは行くんですけれども、世界の中で他国に伍していくことができない。こっちで都合のいいルールをつくるという発想がないんですね。

例えばTPPの交渉だって、TPPというのがもともとあって、もともとあるTPPの条件の中に日本が参加するかどうか議論していたでしょう。参加するかどうかなんて言っている間に向こうが全部アジェンダセッティングして、こういうふうにしましょうとなって、後から参加すると、その中で条件闘争になるわけですね。結局、どれだけ妥協するかということになっていってしまうわけでしょう。最初からそういうものをつくるという発想がないんですよね。

それを思ったのは、私が東工大で教えていたときに、ブータンがGDPにかわるGNHというのをやったときです。GDP、国内総生産はあくまで金額に置きかえるものですよね。国の富というのを金額であらわす。でも、本当に豊かかどうかというのは金額ではあらわせないはずなんですよ。でも、それ以外にあらわす指標がないから、とりあえずGDPでやっているときに、ブータンはGNH、グロス・ナショナル・ハピネス、国民総幸福という概念を打ち出して国民の幸福度を調べているというのを取材に行きました。テレビの取材で行って、戻ってきて東工大でそんな話をしたんですね。

国民にアンケートをとるわけです。例えば、一日に瞑想の時間をどれだけとっているか。さすがチベット仏教の国ですね。静かに瞑想にふける時間をとっているかどうか、あるいは地域の祭りに参加しているかどうかなんていうことを聞くんです。地域のコミュニティーがしっかりしていないと祭りは存続できないですよね。日本のように、あちこちでコミュニティーが崩壊していることによって昔ながらの祭りがなくなってきているところがありますから、地域の祭りに参加するということは、地域のコミュニティーがしっかりしていて、さらにそのコミュニティーにちゃんとその人が溶け込んでいるということです。つまり、地域の祭りに参加しているかどうかということは、この二つのことを聞いていることになるわけですね。コミュニティー

の中で居場所があるのか、それが幸せにつながるんだということを見ていくわけです。そういうのを見ると、これが幸せなのかと、そういうものが失われてしまっている私たちに改めて考えさせるところが多いんです。

そういう話を東工大の授業でやったんですよ。数週間後、テストをしまして、ブータンでは、国民総幸福、GNHというので、例えばこんな指標を使っている、もし日本でGNHを計測することになるとどのような質問項目が考えられるのか、あなたの考えを述べなさいという試験問題を出したんです。そうすると、皆さん方も今既にわなにはまっているんですけれども、東工大生は真面目だから、一生懸命その条件を書き出すわけですよ。

もしこういう答えがあったらいい成績をあげようと思っていたのは、幸福というのは極めて主観的なものであって、客観的なデータで計測すること自体がナンセンスである、そもそもそういう問いかけ自体が意味がないことであるという、私の問いかけに疑問をもつような答えだったんですけれども、残念ながら、皆さん一生懸命考えるわけです。それでも一五〇人のうち二人だけ、ほぼ同じような、そもそも幸福というのは主観的なものであって、客観的なデータでやること自体意味がないことであるのだが、池上教授がそれを答えろと言うから、仕方ないから考えてみるというのが二人いまして、これはいい成績をあげましたね。他は私の問いかけ自体に何の疑問ももたないわけですよ。それでいいんだろうか。

編集部　それが素直だというところですね。

池　上　素直なんですね。先生の問いかけに何の疑問ももたない。高校まではそれでいいわけですね。先生の問いかけに何の疑問ももたない、あるいは先生がどのような答えを求めているんだろうかということを素早く見つけて、それに答えるといい成績がとれるわけですよ。そうやっていい成績をとった人が東大や東工大に入っているんだなと思うわけです。それでいいんだろうか。

つまり、GNHというブータンのやり方をそもそもそういうものだと思って、その中でどういうことをやればいいかという段階で、既にその条件、いわゆる条件闘争といいますか、そのシステムの中で考えているわけでしょう。幸福というのはそんなものであらわせないんじゃないか、もっと違うものがあるんじゃないかという発想を出さないんですね。

編集部　新しいシステムということですね。

池　上　あるいはそういう先生の問いかけ自体に疑問をもつということですね。こういうところが弱いんじゃないかな。

編集部　我々はそういう教育をしているかもしれないですね、先生の言うことを聞きなさいと言って。

池　上　やっているんだと思うんですよ。だからこそ均質ないい成績をとれるんですけれども。

先進国に追いつけというところでは、これは必要だったと思うんです。きちっと知識を教え込んで、きちっと答えられるようにするということは、とりわけ義務教育においては大事なことなんですけれども、これから先、それで済むのかなということですよね。

例えば、マイクロソフトのビル・ゲイツとかアップルのスティーブ・ジョブズとか、普通の常識の枠にとらわれない突拍子もない発想をするわけですよね。そういう人を日本からどんどん生み出していかないと、なかなか難しいんじゃないかなと思うんです。

ただ、一方で教える先生からすると、クラスにそんなのがいると、多分大変なんだろうなと思うわけですよ。

編集部　先生に力量がないと。

池　上　そう。最近でいうと、将棋の藤井君が、あれは名古屋大学の教育学部附属の学校でしょう、何で宿題をしなきゃいけないんですかと先生に食ってかかったというんですよ。ちゃんと授業に出て、いつもちゃんとそこで課題に答えてやっているのに、なぜその上宿題までやらなきゃいけないんですかと先生に食ってかかった。先生は何と答えたか分からないですけれども、藤井君は納得したそうです。藤井君を納得させるようなことを答えなければいけない。そういう先生の力というのが求められてくるんだなと思うわけです。

うるさいですよね。いいから言われたことをやっていればいいみたいなことをつい言いがちですけれども、それは本当はだめなんですね。きちっと論理的に納得させるという力が先生に求められているんじゃないかということなんです。よく、「生きる力」とか、「自ら考え、自ら行動する」と学習指導要領にもありますけれども、自ら考え、自ら行動する、これは実は大変なことなんですよ。

まだバブルの頃、ある銀行の人事担当が、「これからは個性の時代だ、個性ある人材をとろう」と、これまでと方針を変えて、いわゆる優等生じゃない、ちょっと外れているような個性ある人を大量にとったんですよ。するとまあ、銀行の中で秩序を乱してとてもやっていけない。何でこんな人材をとったんだという話になり、あるいは入ってみたら話が違うじゃないかと。個性ある人材を求めているというのに、入ってみたら銀行の秩序の中でどれだけ言うことを聞くかということだったというので、あきれ果てて、結果的にどんどんやめちゃったんです。それで、大失敗だっ

たということになったんですね。個性ある人材をとるというのはそういうことなんです。それだけの覚悟があるのかということですよね。

編集部　育てる方も、それだけの力量があって、その個性を生かせる力がなきゃいけないということですね。

池　上　そうなんです。「自ら考え、自ら行動する」というのは恐ろしいことなんですよ。そういう自覚が先生たちにどこまであるのかなと思う。

　さらに言えば、自ら考え、自ら行動する先生たちがいっぱいになったら、その学校の中で組織の秩序を維持するのは大変なことですよ。

編集部　それを束ねていく校長先生は大変です。でも、これからの時代は、そういう人材を育てていく教育が必要だということは間違いないということですね。

池　上　間違いないですよね。

　みんながみんなそうなるわけじゃなくて、それだけの飛び抜けた人というのは限られるわけですよね。クラスなり、あるいは学校なり、あるいは組織なりにそういう飛び抜けた人たちの能力をどううまく生かしていくのか。学級崩壊や、学校崩壊に至らずに、そういう人たちも取り込んでやっていく力というのが上に立つ者に求められていることなのかなと思うんです。

編集部　子供たちの個性とか多様性というものをうまく取り込んでいける、そういう力が教員には必要なんですね。

池　上　「先生の言うことを聞きなさい」とやっていれば楽ですけれども、それでいいんだろうかということですよね。これは実は大変なことなんですよ。

編集部　連携している小学校の校長先生が、中学になってもすごく素直でいいんだけれども、やっぱり物足りない、小学校でも、日本の学校は協力とかそういったことばかりというか、そこに重きを置き過ぎているんじゃないかみたいなことを話されていたことがあります。

池　上　協力しましょうとか、みんなで一緒にとか、団結とか、みんなで仲よくとか、これはこれで素晴らしいんで

すけれども、よく言われるのは、例えば海外へ行くと、日本人は束になって組織になるとものすごく強い、これは怖い、とても太刀打ちできない、でも、個々で一対一になると大したことないと。

編集部　これからグローバル社会とか国際社会になって、通信も高度通信時代になってきて、政治も経済もどんどん激変してくるわけですよね。社会がどんどん予測不可能になったり、突然違う政権になったり、紛争が起きたり、いろいろなことが世界の中で起きている中で、日本がこれから教育をどのようにやっていくかというのは、先生はどうお考えですか。今の話と通じる部分があると思うんですけれども。

池　上　例えば、求められている正解は何だとか、先生はどんな答えを求めているんだろうということをひたすら考えてやるといい成績がとれるわけですね。東京大学法学部に入れるわけですよ。国家公務員の上級試験に受かり、官僚になっていくと、忖度が大変上手になるわけですね。そういうのを見てしまうなと。要するに、いい成績をとる優秀な生徒のなれの果てが忖度官僚だと私なんかは思うんですよね。

　籠池さんが外国人記者クラブで記者会見して「忖度」と言ったら、通訳が「忖度」という言葉を英語にできなかった。ないんですよ、「忖度」という言葉が。みんな思わず絶句してしまって、「sontaku」というそのまま通用する言葉になりました。ニューヨークタイムズなんかでも「sontaku」とローマ字で表記しています。

　過労死もそうですね。過労死というのは海外にないので。働き過ぎて死ぬというのはあり得ないです。その前に、何でそんなに働くの、働かなきゃいいじゃないという話になるわけです。「work too hard to death」、何だそりゃ、そんなに働くなよで終わるわけですね。

編集部　それほど勤勉な民族ではあるんでしょうけれども。

池　上　そうなんですけれども、やっぱりそういうことではいけないのかなということと、結局はグローバル社会の中での一人一人の個の強さということですね。別に英語でなくてもいいんですけれども、言葉で自分の意見を主張し、相手を説得するとか相手に立ち向かう、そういう個の力というのが求められているのかなと思うんです。

編集部　でも、文部科学省とかいろいろなところがその方向に教育をもっていこうとしているんじゃないかなと思いますし、我々もその方向にもっていきたいと思って、学校で先生たちに指導しているわけですが、池上先生が見ていて、少し変わってきたというところは感じられますか。

池　上　どうですかね。すみません、エビデンスで語らなければいけないんですけれども、具体的なデータがあるわけではなくて。エビデンスがないところの印象批評で言えば、いわゆるゆとり教育――ゆとり教育というのは大分否定的にとられていますけれども、ゆとり教育を受けてきた世代が、例えば芸術の分野ですとかスポーツの分野、そういうところで非常に活躍してきているなと思うんですね。そういう意味でのいろいろな個性豊かなというのかな、これまでにないタイプの人たちが出てきたのかなという、あくまでも印象批評でしかないんですけれども、そういうところはありますね。ただし、全体としては素直ないい子が多い。

例えばですけれども、東工大で私の授業があるわけですね。最初の段階では、二六〇人しか入らない教室で八〇〇人、九〇〇人の応募があったものですから、競争率三倍で、抽選で二六〇人にしました。抽選であぶれた人たちがいるわけですね。そうすると、キャンパスを歩いていると、学生が「先生、あぶれちゃったんですけれども、聞きに行っていいですか」とか、あるいは「実はよその大学の者ですけれども、受けてもいいですか」と私に聞くんですよ。「ばか、そんなこと聞くな。そんなことを聞いたらだめと答えざるを得ないじゃないか」と言うと、ポカンとしていて、しばらくしてやっと私の意味するところが分かるんですね。我々が学生の頃、そんなことをわざわざ聞くやつはいなかった。勝手に潜りの学生がいたわけですよ。もちろんルールを守るというのは大事なんですけれども、そんなことを聞かなければいけない、そんなことを聞くなと言われて何のことか分からない。「素直だな、おいおい」と思っちゃいますね。

編集部　ということは、昔よりももっと素直になっているかもしれない。

池　上　我々の学生時代はあまり素直じゃなかったですから。授業がまともに行われなかったり、先生はつるし上げるものでしたから。それが、先生を尊重し、尊敬し、一目置き…みたいなことになっちゃって、先生は楽ですけれども、そんなのでいいのかなという感じですよね。

編集部　先ほど、個の強さ、言葉で説得するとおっしゃっていましたが、それはこれからのグローバル社会ではますます必要だということですよね。

池　上　今何が必要なのかというので、例えば、今度センター試験がまた新しいものに変わり

ますでしょう。この前、国語の例題というのが発表になりましたけれども、あれを見るとびっくりしますよね。

城見市という架空の城下町で、そこの景観を、古き良きまちをどう守るか、そういう話で、城見市が景観条例をつくりたいというのがあって、景観条例をどのようなものにするかという説明の資料があるわけです。その説明会に行ってきたお父さんが家に帰ってきて、主人公のお姉さんとの間で「どんなことをやったの」というやりとりの会話があるんですね。そこでお父さんが、城見市の景観条例について説明を受けてきた、パンフレットを読んできたとお姉さんに報告している。そのやりとりの文章がずっとあって、それを読んだ上で、妹なのか弟なのか、あなたがそれについての問いに記述式で答えなさいという問題なんです。つまり、膨大な資料を読んで、それについての会話を聞いた上で解釈し、あなたの答えを求めなさいというこれまでにない試験なんですね。

要するに、今は読解力が非常に弱くなってきているんじゃないか。というのは、例えばＰＩＳＡの試験を見ても、科学的なリテラシーとか数学的なリテラシーは上がっているんですけれども、読解力だけ落ちてきているわけですね。そういうことに対する危機感があるんじゃないか。そういうものを読んだ上で自分の考え方を述べる、そういう力をつけてほしいと思っているということですよね。やっぱりそういうことが必要になるのかなと思います。

例えば、フランスの場合は高校卒業の資格検定というのがあるんですね。その試験に受かれば大学はどこでも行けますよということになるんです。日本は大学に入るための試験でしょう。実は日本でもいろいろ議論があって、高校卒業資格検定試験にするべきじゃないかという議論があったんですけれども、それじゃ大変だということになって、結局大学に入るときの試験ということになったんです。

フランスの高校卒業資格検定試験というと、必ず哲学の問題があって、四時間かけるんですね。ギリシャ、ローマ時代のソクラテスとかプラトンとか、そういう定番の哲学者について四時間かけて記述式で答えるという、日本だとても考えられないようなレベルの試験をやっているんです。例えば、今フランスの大統領のマクロンというのはそういうことをちゃんと通り抜けてきているので、彼は哲学について滔々と語れるんですね。だから、ドナルド・トランプとの会談ではドナルド・トランプを言い負かしたと言われているんですけれども、フランスの大統領というのが異彩を放つというか、それぞれみんな大変な力を持っている。シラクにしてもそれ以前の大統領にしても、これは強いですよね。翻って、日本の首相が哲学でフランスの大統

領と丁々発止ができるかとなると、うーんと思っちゃいますよね。これが個の強さということなのかなと思うんです。

編集部　これから日本が世界の中で活躍していける人材を輩出するためには、そういう子供たちも必要だということですか。

池　上　いきなり哲学の試験をやるかどうかというのはともかく、一つの科目に四時間かけて記述式でというのは、採点するほうが大変だなと思うんですけれども、それだけのことができる生徒を私たちは生み出しているのだろうかということだと思うんですよね。

編集部　さっきの将棋の藤井君が、「傾倖」だとか、司馬遼太郎の本なんかをよく読んでいるなんていう話が話題になりましたが、そういう力というのは読書なんかと通じるのですか。

池　上　藤井君は新聞を読んでいるそうですね。毎日ちゃんと新聞を読んでいる。今どき家に来る新聞をきちっと読んでいる、それだけで珍しいですから、それは「傾倖」だって出てくるわねと思いますね。

　ちなみに、担任の先生は数学だったので、「傾倖」は思わず辞書を引いたそうですね。

編集部　我々でも使わないですよね。

　これからだんだん人工知能とかＡＩの社会になって、職業構造とかも変わってくる中で、中学校教育でどういう子供たちを育てたり、キャリア教育とかをやっていったりしたらいいのでしょうか。

池　上　驚くべきことに、この前アメリカでゴールドマン・サックスが、投資銀行の最先端ですけれども、ディーラーとか高給取りを、年収一億円ぐらいの連中を大量に首切ったんですよ。全部ＡＩに置きかえられるから。

　例えば、どうやって利益を上げるかみたいなことでいえば、今、株取引というのはみんな高速のコンピューター取引で、全部ソフトでやっちゃうんですよ。だから、最近の株価の変動というのは、ボラタリティーというんですけれども、いきなり上がったり下がったりが大きいんです。上がるときはものすごく上がるし、下がるときは暴落するのは、それぞれのところがコンピューターのソフトで、一旦下がり始めると、持っている株が損しないように、もっと下がる前に売ってしまおうというのをみんな同時にやるものですから、結果的にものすごく暴落するということになっているんですね。昔は人間が判断してきたものを、全部ＡＩで置きかえることができているんです。

　となると、昔は高度な仕事と思われていたものは、今は全部ＡＩに置きかえられるんですね。皮肉なことなんですが、ＡＩがどんなになっても生き残る仕事というのは現場

の清掃員。要するに、階段から何から掃除をするというのは、AIだけでは、あるいは自動の機械、ロボットだけでは置き換えられないから、結局そういう仕事は人間にしかできないよと。

編集部　高度な方がAIになる。

池　上　中途半端に高度なものは全部AIに置きかえられてしまう。つまり、これまで「これからは高度な知識を身に付けなければいけない」と言ってきたものは全部AIに置き換えられるんですよということになって、愕然としているというのが現実なんですね。

　結局、AIで置き換えることができないものは何かというと、AIを設計するソフトをつくる人なんです。AIに条件を与えれば、条件に基づいて何でもやってくれるわけですよね。アジェンダセッティングとか、条件を設定するのは人間じゃないとできないんです。

編集部　そういうことと、今度小学校からプログラミング教育をやるというのは関連しているんでしょうか。

池　上　プログラミングをやっていいのかと私なんか思っちゃうんですけれども。個人的には、英語をやったりプログラミングをやる時間があったら、もっと母語をちゃんとやれよと思っちゃうんです。プログラミングでAIなどの仕組みを理解するというのは、それはそれで大事なことなんでしょうけれども、中途半端なプログラミングなんて全部AIに置き換えられてしまいますからね。

　社会はどうあるべきなのか。つまり、AIは社会はどうあるべきかなんていうことを考えることはできないんですよね。勝手に社会はどうあるべきか考えろという条件をつくれば、こういう条件の場合はこういうことが考えられますということはAIは考えられます。そういう条件を考え出すのは結局人間なんだよということになるわけですね。だから、AIを使いこなす人材とAIに使われる人材に分かれてしまうという、あまり明るくない未来が……。

編集部　でも、そういう中でも母語に戻るというか、母語を大事にするべきだというのは、そこに何か未来を切り拓いていくものがあると考えるからですか。

池　上　自分は何語でいろいろなことを考えているんだろうかということですよね。

　もちろん、外国語も絶対大事なんですね。母語以外の言葉というのは絶対必要なんですよ。なぜ必要かというと、そこで初めて母語が客観視できるんですね。客観的に物事を見ることができるわけです。私たちは、英語を学ぶことによって初めて、「日本語と違う言語体系があるんだ、主語の後に動詞が来るんだ」とか、「一人称と三人称では動詞が変化するんだ」とか、「目的語が」とかいうことを知

るわけですよね。イエスかノーかをはっきりしなければいけないとか、否定をまず最初にもってくるんだ、日本語はそうじゃないんだよねということを知るわけです。これはとても大事なことなんですよね。

何で英語を学ぶかといえば、もちろん世界の中でコミュニケーションをとる上で英語が一番汎用性が高いからやっているわけです。と同時に、私たちがふだん使っている日本語がどんな言葉なのかということを知る、それがとても大事なことなんです。そして、人間は誰しも、物事を論理的に考えるときに一番どの言葉でやるかといえば、慣れ親しんだ、最初に身に付いた言語を使って物事を考えるわけですよね。そのときに論理的に物事を考える力というのがとても大事なことなんじゃないかなと思うんです。

よく日本語は英語やフランス語に比べて論理的でないと言う人がいるんですけれども、そんなことはないんですよ。そもそも論理的でない言語は成立しないんです。論理体系があるから言語として成立しているんですよね。だから、日本語が論理的でないと言う人は日本語で論理的な表現ができないだけだと思うんです。日本語だって、きちっとやっていくと非常に論理的な言葉なんですよね。母語を論理的に操る力というのがあって初めて、物事を論理的に考えたり、あるいはほかの言語を操る人と対等に議論していく力が身に付いてくるのかなと思うんです。

AIがうんと広がれば、自国語でしゃべってもAIが訳してくれますから。だからといって、やらなくていいということじゃないんですよ。英語とかほかの言葉を知って初めて自分の母語というのを客観視することができるわけですから、絶対必要なんですけれども、相当部分、大事なところはAIがこれからやってくれるかもしれないということですよね。

さらに言うと、例えば数学ができなかったり理科ができなかったりするのは、実は応用問題の日本語が理解できないからだと思います。応用問題になると急にできなくなる。全国学力テストでいうと、A問題はできるけれども、B問題になると急に正答率が落ちるというのは、実は言語力というか国語力が弱っているからじゃないかと思っちゃいますよね。

編集部　そういう意味では、中学校教育――小学校からなんでしょうけれども、もっともっと読む力とか書く力を、それも日本語を使ってしっかり子供たちが自分の意見や考えを表明できる、そういうことをベースとしてやらなきゃいけないということですね。

池　上　私はそう思うんですね。よく日本で、中学校、高校あるいは大学までやっているのに、全然英語がしゃべれないと言う人がいるでしょう。私は、あれは英語がしゃべれないんじゃなくて、英語でしゃべるべき内容をもってい

ないからだと思うんですよ。日本のエリート官僚が海外に行って国際会議に出るでしょう。国際会議では同時通訳が入ったりするからいいわけです。終わって夜になると、立食パーティーがあったりするわけですね。そこで握手して初めて「Ｈｏｗ　ｄｏ　ｙｏｕ　ｄｏ?」と言って、さあ、そこから先、何を言うかというと、出てこないんですね。日本人はしゃべるべきものをもっていないものだから、大体昼間の仕事の話の続きをやろうとするわけですよ。そうするとひんしゅくを買うわけですね。こんなパーティーの場で仕事の話なんかするなよ、もっと趣味の話とか芸術の話とか、美術や音楽の話とか、そういう話をしようよと言った途端、日本の連中は何にもできないわけです。そういうところに出てくる向こうの連中というのは、それこそいろいろな芸術とか、それぞれのときについて語るものを大昼にもっているんですね。そこで太刀打ちできないんです。しゃべれないんですね。それで自分の英語力がないんだと勝手に思い込む。英語力がないんじゃないんですよ。そこで語るべきものをもっていないんです。

私も、海外へ行くと最初は何も出てこないわけですね。ところが、取材しなければいけない。切羽詰まって、ここでとにかく英語でしゃべらなければいけないというと、単語を並べるとそこそこできたりするんですよ。結局、話すべきというか、質問すること、聞き出さなきゃいけないことがあるときは会話が成立しちゃうんですね。これは日本の中学や高校の英語の、例えば文法とか、ちゃんと基礎が身に付いているからできるんだなと思います。主語があって動詞があってみたいな、ここは三人称単数Ｓだなみたいなことがとっさにできちゃうんですよ。それは聞かなきゃいけないことがあるからなんですね。日本の英語の基礎がちゃんとできているんだなと私は思うんです。発音はいま一つかもしれないけれども、会話ができちゃう。英語が話せないと言う人たちは、英語が話せないんじゃない、英語で話すべき内容をもっていない。

編集部　自分の趣味とか文化とか芸術とか宗教とか、そういうものを自分から発することがないんですね。

池　上　だって、大学受験のときには、そんな余計なことはやるな、試験勉強さえやっていればいいとなるでしょう。音楽とか芸術は二の次にしてエリートになっていると、太刀打ちできないんですよね。

編集部　まさに教養ということですよね。先生の本の中で教養が大事だとおっしゃっていましたが。

池　上　いささか我田引水になるんですけれども、リベラル教育というのは、アメリカの場合は特に、ハーバードとかスタンフォードとか、ああいう名立たる大学の最初の四年間はみんなリベラルアーツですから。

編集部　でも、日本の教育の、例えば中学校だったら美術

とか音楽だとか、そういう下支えするものを教科の中でやっていますよね。中国から来た子たちなんかは、美術なんかないとか、体育なんかない、校庭もない、とか言います。

池　上　中東イスラム圏だと、だいたい体育はないですよね。あるいは、うんと厳格なところだと音楽がないんです。音楽は天国に行ってから楽しめばいいので、何で地上でやらなきゃいけないんだと。あるいは、厳格なところだと、肌を見せちゃいけないというのは別に女性に限らないんですね。男性も半ズボンなんていうのはとんでもないということになったりするんです。例えば、中東で軍隊に入ると、一列の前へ倣えとか行進ができないんですよ。そこからやらなきゃいけないんですね。

美術なんてないでしょう。日本の、特に中高年、団塊の世代がリタイアしてヨーロッパに行くと、みんな美術館へ行くんですよ。観光地に行くと中国人観光客がいっぱいいるんですけれども、美術館に行くと中国人観光客がいなくなるんです。日本人観光客ばかりになるんですね。ルーブル美術館にしてもオルセーにしても、名立たる美術館に行って、みんな何をやっているかというと、「ああ、中学や高校の美術の時間で出てきた出てきた」「モネだ」「マネだ」「印象派だ」みたいな、結局、中学の美術の教科書で出てきた絵を確認しているんです。それだけじゃないかと思ったりするんですけれども、これはすごいんですよ。そういう基礎的なものをもっているんですね。

編集部　知識としてはあるんですね。でも、自分のものとして血肉にはなっていないからしゃべれない。

池　上　そういうことですよね。だから、今、遅ればせながら、団塊の世代がヨーロッパの美術館を見て、ああ、これだこれだと言って、そこで初めて、そういえば印象派って何だろうかとかいうことを学んでいる。そういうことを学ぶことができるというのは、中学までの基礎があるからなんですよね。基礎があるんですから、それをもうちょっと生かしてほしいなと思います。

編集部　受験に関係ないと思って、どこかで軽視しちゃうんでしょうか。

池　上　そうだと思うんです。人生の上でそれはとても大事なことなんだということですよね。

編集部　そういうことが大事だということを、校長も含めて教員がどんどん伝えていくことが大事なんですかね。

池　上　そうだと思います。

編集部　我々教員もよく主要何教科みたいな言い方をしたりするんです。だから、教員の中にもそういうのが潜在的にあるのかもしれないですね。

池　上　主要五教科みたいなね。じゃ、残りの四教科はどうなんだと。

私のときは都立高校の学科試験が九教科だったんですよ。音楽から技術家庭から体育から、全部学科試験でやったんですよね。九〇〇点満点でしたから。大変だったんですけれども、結果的に今それが生きていますよね。

編集部　基礎的なものはまず大事だし、広くいろいろなものを学ぶことが大切なのですね。

池　上　例えばクラシックでも何でも、基礎的なものは「ああ、聞いたことがある」となるわけでしょう。聞いたことがあるというだけで、さっと名前が出てこなかったりするんだけれども、これは大したものですよね。

だから、結論的に言うと、中学までの教育というのはやっぱり日本は大変なものなんですよ。だけど、それを生かしていくというのか、その上に橋渡しをしていくということ、あるいはそういう中学のものがとても大事なんだよということを伝えていくということが必要ですよね。

英語で、もう亡くなりましたけれども、國弘正雄さんという同時通訳の天才的な人がいて、昔ですけれども、中学の英語の教科書をひたすら声に出して読むべきだ、中学三年までの英語さえやっておけばいい、基礎基本は大事なんだと言われて、私もそのときに中学の英語の教科書をみんな買ってきました。さすがに中学一年の教科書はものすごく易しいので、二年、三年の英語の教科書をひたすら声に出して読むということをやると、基礎的なことはここでみんな身に付くんですね。そこから先は、もちろん単語はもっと必要になりますけれども、そういう単語さえやっていけば、実は中学三年までで十分だと思うんです。

あるいは私の場合は、例えば選挙になると政治のことを分かりやすく解説していますけれども、何のことはない、みんな中学三年の公民の教科書に出ている話ですよ。憲法改正をするにはどうしたらいいのか、衆議院と参議院の三分の二以上の賛成で発議し、国民投票で過半数でというのはみんな中学三年の公民の教科書に書いてあるんです。これだけ入っていると現代の教養人になるんですね。ということに大人になって気付くんです。中学三年までちゃんとやっていれば、立派な社会人として送り出せるんだよと中学校の先生がもっと自信をもっていいと思うんですね。今になって中学の教科書を見ると、よくできているなと思いますよ。

編集部　うれしい言葉ですね。中学校教育に力をいただける感じです。

本日はありがとうございました。